

石見銀山遺跡発掘調査概要 8

1997. 3

島根県大田市教育委員会

序

中世遺跡の発掘調査が全国でおこなわれ、その調査や整備事業などに关心が寄せられている昨今、また最近の“戦国時代ブーム”により、今日、石見銀山がもつ歴史的意義や遺跡などが一層注目されるようになりました。

石見銀山については改めて紹介するまでもないのですが、戦国時代には大量に生産された石見銀が、中国や東南アジアに流れ、日本とこれらの国々の貿易や政治・経済に大きな影響を与えたといわれています。

大田市教育委員会では、史跡・町並み・美術工芸品など、石見銀山に関連するたくさんの文化財を保存し未来に伝えるために、調査や整備、町並み保存事業などに取り組んでいます。遺跡の発掘調査も近年では石見銀山の最盛期に盛んに銀が生産された、仙ノ山山頂の石銀で調査をおこない、多くの成果をあげているところであります。

本書が、石見銀山遺跡に対するご理解と、今後の調査研究の基礎資料として活用されるよう祈念いたします。

平成9年3月

島根県大田市教育委員会

教育長 大久保 昭夫

例　　言

1. 本書は平成6・7年度の国庫補助事業として島根県大田市教育委員会が実施した、石見銀山遺跡発掘調査の報告書である。

2. 調査体制は下記のとおりである。

事務局　　島根県大田市教育委員会

教育長　　大久保昭夫

文化振興室　湯川　淳一（平成6年度）

宮脇　正寛（平成7年度）

那須野保夫

大国　晴雄

遠藤　浩巳

中田　健一（平成7年度）

調査指導

平成6年度

田中　圭一（筑波大学歴史人類学系教授）

葉賀七三男（資源素材学会理事）

村上　勇（広島県立美術館主任学芸員）

松村　恵司（文化庁記念物課調査官）

今岡　一三（島根県教育委員会文化課主事）

平成7年度

村上　直（法政大学教授）

松尾　信裕（（財）大阪市文化財協会主任）

神崎　勝（妙見山麓遺跡調査会）

3. 収録した地図・実測図は大田市教育委員会が作成したものを主とし、一部については関係機関作成のものを利用した。

4. 出土遺物及び作成した図面・写真は大田市教育委員会で保管している。

5. 実測図等に示した方位はいずれも磁北である。

6. 本書の執筆は上記の遠藤がこれをおこない、関係各位の協力を得た。

目 次

I 調査の概要・経過	1
II 石見銀山遺跡の概要	4
III 調査の概要	9
IV 小 結	21
V 写 真 図 版	23

挿図・目次

図1 石見銀山遺跡位置図 (1/25,000)	2
図2 石銀地区調査地位置図 (1/5,000)	3
図3 石銀地区調査区設定図 (1/300)	10
図4 遺構配置図 (1/80)	11~12
図5 坑道実測図 (1/40)	14
図6 坑道前出土肥前磁器実測図 (1/3)	14
図7 岩盤加工遺構実測図 (1/40)	15
図8 SK1実測図 (1/30)	16
図9 石積土抗実測図 (1/30)	16
図10 1号炉・2号炉実測図 (1/20)	17
図11 1号炉・2号炉断面図 (1/20)	18
図12 道跡実測図 (1/60)	19
図13 つるはし・羽口実測図 (1/3)	20
図14 石銀地区遺構配置図 (1/200)	22

I 調査の概要・経過

石見銀山遺跡は昭和44年に史跡指定を受けて以来、代官所跡や坑道跡である間歩を中心整備と活用が進められている。また埋蔵文化財としての石見銀山遺跡は、昭和58年度以降継続して調査が実施され、地下に埋蔵された産銀遺跡など、これまで未解明であった遺跡の実態が少しづつ明らかにされている。

平成3年度は、銀山下河原で製錬所（吹屋）跡が検出された。吹屋の規模は間口6間、奥行10間以上の大規模な礎石建物跡で、内部に要石や石組の作業台、井戸、溝などの施設をもち、土間面のいたる所が焼土化し、一面からからみやゆりかすが出土している。遺跡の年代については17世紀前半と考えられる。造構として炉跡が検出されていないため、吹屋の性格については今後の課題である。

平成4年度は、国指定史跡山吹城跡の大手にあたる下屋敷地区でトレンチ調査をおこない、戦国期の城館遺跡の一部や江戸時代初頭と考えられる吹屋の造構が検出された。吹屋は礎石建物跡でトレンチ内で炉跡が2ヶ所検出され、周辺からは大量のからみと、塩や分銅などの遺物が出土している。炉跡については構造等から精錬工程のどの段階の炉であるのか特定はできないが、出土したからみの様態や外観から永久鉱床の鉱石が精錬されたものと推測される。

平成5年度は、仙ノ山山頂の東に広がる石銀地区の中の千畳敷南向山地区で調査をおこない、17世紀前半と考えられる選鉱と精錬をおこなった製錬所（吹屋）跡が検出された。この吹屋の建物の構造については、既に露出していた石垣の位置に対応して南北と東西方向に礎石列が検出されたことから礎石建物跡と考えられ、内部に土坑、石積土坑、炉跡などの施設が存在している。平成5年度の調査地は、石銀地区の西側に位置する幅40mの谷合に位置し、調査面積は160m²である。この谷合のほぼ中央に、道跡が東西方向に存在することが確認されており、道跡の両側には平坦地が存在している。

平成6・7年度は、5年度からの継続調査として、石銀地区的千畳敷南向山地区で調査をおこなった。調査対象としたのは、道跡とその南に隣接する平坦地290m²である。調査の結果、平成5年度と同様に製錬所跡と考えられる建物跡が検出された。調査成果として注目されるのは、精錬炉の造構が良好な状態で検出されたことである。その他の内部施設については土坑・石積土坑などの施設がある。精錬炉とその周辺部分50m²については調査区を拡張して全体像を把握する必要があり、平成7年度の継続調査とした。調査期間は平成6年度は平成6年10月から12月までの3ヶ月間を、7年度は平成8年3月の1ヶ月間を要した。またこの2ヶ年間に計6回の調査指導会を実施し、多くの指導・助言を得るとともに、現地の作業については地元から参加していただいた調査作業員の皆さんをはじめ、多くの方々からご協力いただいた。改めて感謝致したい。

石銀地区は分布調査などの結果、広範囲に遺跡が存在することが以前から確認され、石銀地区を



図1 石銀地区位置図 (1/25,000)

含め石見銀山遺跡の全体像を握ることが急務であると指摘されてきたところである。平成5年度からは発掘調査等の基礎資料となる500分の1の遺跡測量図の作成を開始し、遺跡の調査と保存保護に備えることにした。



図2 石銀地区調査地位置図（1/5,000）

II 石見銀山遺跡の概要

1. 石見銀山史について

(1) 戦国期の再開発と争奪戦

石見銀山は鎌倉時代の末期の延慶2年(1309)、大内氏により発見されたと伝えられている。その後の本格的な再開発は、大永6年(1526)に博多の豪商神屋寿貞と出雲鷲銅山(島根県大社町)を経営した山師の三島清右衛門が入山、「三人の穿通子吉田与三右衛門、同藤左衛門、於紅孫右衛門を引連れ銀峯山の谷々にて石を穿ち、地を掘て大に銀を探り、寿亭皆收め取り九州に帰りけり」(『銀山旧記』)と記されている。その後寿貞は天文2年(1533)に博多から慶寿と宗丹という二人の精錬技術者を連れてきて、当時朝鮮半島でおこなわれていた「灰吹法」という銀精錬法を現地に導入、その後産銀量は著しく増え、16世紀の中ごろから17世紀にかけて石見銀山は最盛期を迎えることになる。

石見銀は銀山が佐摩村にあったことから「ソーマ(Soma)銀」と呼ばれ、海外にも多量に輸出され、中国や朝鮮半島などのアジア諸国とポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国を交易で結ぶ役割の一端を担ったといわれている。16世紀の産銀量や日本から海外に持ち出された量については不明であるが、17世紀前半の産銀量は年間約1万貫(約38トン)と推定され、世界の産銀量の3分の1を占めていたといわれる日本銀のかなりの部分を産出していたと考えられている。海外の文献にも日本銀が大量に海外に運ばれたことが記されており、「福建の唐人が銀を買うために日本へ行き、風に吹き流されて朝鮮にいたった」(『朝鮮中宗実錄』)や、「インドのカンパヤの薬品やマラバール・南洋諸島の香料を積んでシナに向かう船は(中略)のちに日本銀を積むのが主要な目的となつたため、ナウ・ダス・プラタス(銀船)と呼ばれるにいたつ」(『フレデリチ航海記』)とある。

戦国時代の銀山の争奪戦については、大永の再開発以来、永禄5年(1562)に毛利氏が銀山を掌握するまで、周防守内氏、川本の小笠原氏、尼子氏等の激しい争奪戦が繰り広げられた。石見銀山攻防戦の拠点となったのが要害山に築かれた山吹城である。この争奪戦は『銀山旧記』『陰徳太平記』などによると、大内氏が銀山を支配下に置くのが大永年間(1521~28)で、その後享禄4年(1531)に川本の小笠原長隆が銀山を手に入れるが、天文2年(1533)には大内氏が奪回する。同6年出雲の尼子経久が銀山を攻め一時期銀山を掌握するが、同8年再び大内義隆が奪回、翌9年には尼子晴久が銀山を攻略、さらに翌10年には小笠原氏が銀山を攻め支配下に置いている。このように銀山の争奪戦は大内氏・小笠原氏・尼子氏の間で繰り広げられるが、その後は大内氏のあと嗣業を得た毛利氏と尼子氏の激しい攻防戦が始まる。弘治2年(1556)吉川元春は山吹城を攻め手中に収めるが、永禄元年には尼子氏が河合郷の堂ノ原で銀山通路を遮断、山吹城を孤立させることで銀山を奪取した。同2年毛利氏は銀山の回復に力を注ぎ、同年7月

には吉川元春・小早川隆景らと兵一万四千で仙山に在陣し山吹城を攻めたが失敗した。しかし同5年城主本庄常光を懐柔して軍門に降らせ、銀山と山吹城を完全掌握することとなった。毛利氏の銀山の直接の管理は休谷の山吹城の大手に位置する休役所が拠点となつた。休役所の管理は福光郷・大家西郷に本拠を置く石見吉川氏がおこなつていた。

戦国時代の銀山の具体的な支配・経営の実態については不明な点が多いが、天正9年(1581)7月5日の「石見銀山納所高注文」(『毛利家文書』)には、石見銀山で得た銀のうちから各方面に上納・支出する部分が項目ごとに記されており、朝廷に収める公用分、聖護院門跡へ上納する聖門領、銀山奉行と推定される下河原に居住していた生田・服部両氏の取分である下河原生田・服部分、合わせて年間銭33,072貫、銀にして115貫752匁であった。これは43匁を一枚の板にすると2,692枚となる。これに山役960枚を加え、計3,652枚を収めることになるが、さらにこのほか年中節句御礼銭・いし金口役・むろ役・「荒屋敷荒床ヨリ納む代」などの費用にも充てられていた。この頃の年間産銀量は数百貫以上もあったと推定されており、同納所高注文にみえる額の数倍が毛利氏の収益となつてゐたと考えられる。またこの史料からはいし金(石銀)が盛んに稼行しており、毛利氏の銀山開発の拠点として重要な位置を占めていたと推測される。

豊臣秀吉は本能寺の変後、毛利輝元との間で講和条約締結の交渉を進めていた。石見銀山の管理は天正年中に秀吉が派遣した近実若狭守と毛利方の三井善兵衛が共同で奉行することになったという(『銀山旧記』)。これは天正12年のことと推定され、同19年には毛利輝元が秀吉の命を受け、銀山と分国内の運上を支配するため林就長と柳沢元政の両名を奉行に任命している(『毛利家文書』)。以後慶長年間に至るまで石見銀山奉行とよばれ、銀山の管理に重要な役割を果たしたといわれる。

(2) 大久保長安の経営と江戸期の石見銀山

慶長5年(1600)徳川家康は大久保長安と彦坂元正を石見に派遣、石見銀山帳收に乗り出した。慶長5年の「銀山諸役銀請納書」(『毛利家文書』)によれば、納銀定高が2万3千枚であるが、14,077枚27匁5分が未進となっていることを、毛利氏の代官であった今井越中ら四名が大久保長安に報告している。その後長安が初代奉行として石見銀山の経営と石見地方の支配にあたるが、その特徴は外部の地方巧者や毛利氏時代からの有能な地役人を登用したことである。慶長10年の「大久保長安諸役員申付状」(『吉岡家文書』)では「地方のくゝり」を竹村源兵衛・河井小右衛門が、「諸役のくゝり」を岩崎玄斎・岩佐才右衛門が直接あたることを定めている。また城普請についても定められているが、毛利氏の奉行所であった休役所が長安の時代にも引き続き奉行所となり、慶長9年から大規模な普請がおこなわれた(『高橋家文書』)。

大久保長安の銀山経営の特徴は、長安と山師が決められた割合で鉱石を分ける荷分制という新しい経営技術と、長安が身に付けていた甲州流の鉱山技術といわれる。後者はこれまで湧水

のために稼行が困難であった坑道を、排水坑道を掘ることにより再生させたこと、また地下深く掘る場合の酸欠対策として、空気抜きの堅坑を掘るようにしたことがあげられる。その他には吹屋(製鍊所)を直接経営している。長安の時代には支配領域が銀山中心であったのに対し、二代目の奉行竹村丹後守の時代には銀山の周辺地域を含めた石見国(現島根県)の実質的な支配が行われるようになったといわれている。

石見銀山は慶長から寛永期に最盛期を迎え、当時の産銀量は年間8千貫から1万貫はあったと推定されている。なかでも山師安原備中が開発した釜屋間歩は毎年3千6百貫の銀を産したという。また銀山経営を支える仕組みとして、元禄年間(1688~1704)の頃より石見銀山領の村々のうち佐摩村を中心とした周辺の邇摩郡・安濃郡・邑智郡に銀山御囲村32ヶ村が設定され、坑内の支柱(栗材)や灰吹銀精錬用材や坑内作業に必要な繩・吼などを供出することが義務付けられた。それぞれの坑道については慶長初期頃から奉行所(代官所)直営の御直山と、山師の請負山である自分稼山があった。御直山の経営は公費から資金・資材が供給され、出鏈(鉱石)を一定の割合で公儀・山主・銀掘りに依分け(荷分け)されるもので、その割合は時代により変遷があった。寛永期以降になると次第に坑道が深くなり、湧水処理に経費がかかるようになり、延宝年間(1673~1680)にはいると産銀量は年間約4百貫に減り、幕末の安政6年(1859)には30貫と記録にある。

江戸期を通じて奉行・代官・預りが59人も入れ替わり、石見銀山附御料4万8千石の統治と銀山の管理をおこなっている。

(3) 近代の鉱山開発

明治維新後、石見銀山は太政官布告により地元の田中義太郎に払い下げられ経営が続けられたが、明治5年(1872)の浜田沖地震で間歩はほとんど水没し、全山休山状態となった。同20年大阪の藤田組に権利が譲渡され、仙山南の本谷鉱区で採掘が再開された。このときから大森鉱山が正式名称となり、仁摩町大國の柑子谷永久稼所が開発の中心となった。同35年には発電所を建設、電動式ポンプにより揚水で再び活況を呈した。主要商品は銅で、日清・日露戦争の軍需景気に乗り隆盛をみた明治後期から大正初期には、永久谷は一大鉱山町に発展した。大正6年(1917)の大森鉱山の従業員は約700名であったと記録されている。しかし第一次世界大戦後の反動景気により銅価が下落、そのうえ安価な外国産銅におされ、ついに大正12年6月に休山に追い込まれた。昭和16年(1941)国の援助で同和鉱業株式会社が再開発をおこなったが、同18年山陰地方を襲った大水害により、永久谷は地形が変わるほど土砂が堆積し、再開発は断念されることになった。

〔主な参考文献〕

- 1 『石見銀山に関する研究』山根俊久、石東文化研究会、1932年（臨川書店復刻、1978年）
- 2 『日本鉱山史の研究』小葉田淳、岩波書店、1968年
- 3 『江戸幕府石見銀山史料』村上直・田中圭一・江面龍雄、雄山閣、1978年
- 4 『同和鉱業100年史』同和鉱業株式会社、1985年
- 5 『島根県の地名』平凡社、1995年

2. 石見銀山遺跡について

遺跡はその内容から城館遺跡・銀生産遺跡・銀山支配関連遺跡・信仰遺跡・その他の遺跡に大別される。間歩・墓地・城跡など14ヶ所が国指定史跡になっている。遺跡の発掘調査は大田市教育委員会が昭和59年度から継続して実施している。

(1) 城館遺跡

銀山争奪戦の拠点となった山吹城跡のほか、周辺に山吹城攻防の際に毛利氏が在陣した仙山頂上の仙山城郭群、大内氏の築城といわれる矢滝城がある。山吹城は国指定史跡である。

要害山に築かれた山吹城跡は頂上部に階段状に郭を配し、主郭の南には大規模な空堀、南斜面には計19本の堅堀、北側の郭には一部石垣がみられる。山麓の大手の下屋敷地区には休役所跡と硝薬蔵跡には大規模な石垣が存在している。下屋敷地区ではトレンチによる発掘調査がおこなわれており、休役所に関連する遺構が検出されている。

(2) 銀生産遺跡

坑道跡、吹屋（製錬所）跡がある。坑道は仙山の頂上部に近い位置に賦存する福石鉱床と、要害山の地下に賦存する永久鉱床が開発されたもので、坑道の分布状況は鉱床が賦存する範囲とほぼ一致する。戦国期の採鉱については露頭掘りと考えられ、仙山の山頂付近の石銀では露頭掘りの痕跡と推測される溝状の遺構が発掘調査で検出されている。坑道のうち大久保間歩・釜屋間歩・本間歩・龍源寺間歩・新横相間歩・福神山間歩・新切間歩は国指定史跡である。

吹屋跡としては分布調査などにより柄畠谷吹屋跡、山神奥吹屋跡などがあり、発掘調査されたものに下河原吹屋跡、山吹城下屋敷地区で検出された吹屋跡がある。下河原吹屋跡は間口6間、奥行き10間以上の敷地をもつ礎石建物跡で、内部に製錬施設をもっている。

(3) 銀山支配関連遺跡

南北に細長い大森の町並みの北側に国指定史跡の代官所跡が位置している。文化12年(1815)に普請された表門と長屋が現存する。代官所敷地内の発掘調査からは建物の基礎となる石列が検出されており、蔵の遺構と考えられている。代官所跡の東には中間長屋跡・向陣屋跡・御銀蔵跡・馬場跡があり、行政機関や役宅が集中している。江戸時代の銀山町はその周囲に柵列を

巡らし、9ヶ所の口番所が出入り口となっていた。蔵泉寺口番所跡の発掘調査では、柵列の基底部と考えられる石列が検出されている。また間歩の入り口には四ツ留役所が置かれていたが、龍源寺間歩前の発掘調査では石列や礎石の一部が検出されている。

(4) 信仰遺跡

寺院・神社跡と墓地などがある。墓地には多数の墓石が確認されており、宝篋印塔・五輪塔・無縫塔などがある。墓石の形態から戦国時代末から江戸時代の前半を示すものが多いとみられ、特徴的なものに宝篋印塔・五輪塔に、高さ1mに満たない一刻彫りのものがある。これらの石材は邇摩郡温泉津町で盛んに生産された福光石のものが大半である。寺院・神社跡については分布調査などにより33ヶ所が確認されている。天正在銘宝篋印塔基壇・安原備中墓・伝安原備中墓所・大久保石見守墓所・佐尾壳山神社は国指定史跡である。

(5) その他の遺跡

町年寄造宅・郷宿造宅・地役人造宅・同心造宅などの建物跡がのこされている。地役人河島家敷地内の発掘調査では、江戸時代初期と考えられる石列や井戸跡が検出され、現在の町並みの下層には町の大半を焼失した寛政12年(1800)の大火以前の町並みの遺構が遺存している可能性がある。近代遺産としては銀山の清水谷に藤田組により建設された清水谷製錬所跡の遺構が大規模なものである。関連するトロッコ道の跡や事務所跡・変電所跡などがのこされている。

(6) 出土品

発掘調査の出土品で最も量が多いのが陶磁器である。年代は概ね16世紀後半以降で、産地は国内では唐津・伊万里・備前・信楽・瀬戸美濃などが、海外では中国、李朝系のものがある。そのほかにかわらけや土師質のるつぼなどがある。金属製品としては坑内作業で使用される轡や古銭・分銅・キセル・鉄砲玉などが、精錬関係の遺物にふいごの羽口や精錬のかすであるからみや炉壁などがある。

〔主な参考文献〕

- 1 『石見銀山遺跡発掘調査概要』1~7、大田市教育委員会、1984~1994年
- 2 『石見銀山遺跡分布調査報告書』島根県教育委員会、1986年

III 調査の概要

1. 遺跡の位置と環境

石見銀山遺跡石銀地区は大田市大森町大森字千畳敷南向山イ1621番地他に所在する。石銀は仙ノ山、通称銀山の山頂の北から東にかけての、標高470m前後の地点に広範囲に存在する平坦地の名称である。石銀は鉛の古名であり、かつて銀とともに鉛の鉱石がこの地一体に存在し、採鉱の対象となつたことが想像される。地名として「石銀池ノ段」「石銀薬師ノ段」「金生山」などがある。石見銀山の開発は戦国時代から本格的に始まるが、この時期の文献等資料が少ないため、その実態は不明な部分が多い。『銀山旧記』は銀山の再開発を手懸ける博多の商人神屋寿貞と出雲鷲浦の銅山師の三島清右衛門が大永6年(1526)銀山に入り採掘をはじめ、天文2年(1533)に灰吹法を伝えているが、この時さかんに採掘されたのが石銀一帯の鉱石と考えられている。石銀は仙山に頂上近くに賦存する福石鉱床の上部にあたり、福石鉱床の鉱石については鉱床・鉱石学の側から、自然銀を含み、輝銀鉱・方鉛鉱・酸化鉄で黄銅鉱・黄鉄鉱はきわめて稀であるという高品位な鉱床であるとされている。そして鉱床の上部ほど品位が高いといわれる。このような自然条件と歴史資料の記述は一致すると考えて妥当であろう。

石銀の初見史料は天正9年(1581)の「石見銀山納所高注文」(『毛利家文書』)で、毛利氏支配下での銀山の公納額が記載されているが、その中に「いし金口役」とみえる。慶長5年(1600)11月の「石見銀山諸役未進付立之事」(『吉岡家文書』)によれば、慶長期に「石金ノ酒役」として税が課せられており、石銀に酒屋がかなりあり鉱山の町が展開していたと想像される。また「高野山淨心院過去帳」(『上野家文書』)には石銀に39人分の檀家名が記されている。石銀本谷・石銀曾根・石銀のひら・石銀小池ノ段などのに居住し、ほとんどが天正から寛永期のものである。

石銀地区の分布調査の結果、宅地と思われる平坦地、坑道・井戸・寺・墓地・道・池・溝などの跡が広範囲に確認されている。その範囲については今後の分布調査を待つことになるが、現時点で20ヘクタール前後は広がると考えられる。分布調査の際に表採された遺物に、陶磁器・臼・羽口からみなどがあり、陶磁器の年代については、16世紀末の中国陶磁や17世紀の初頭の肥前陶磁がある。



図3 石銀地区調査区設定図 (1/300)

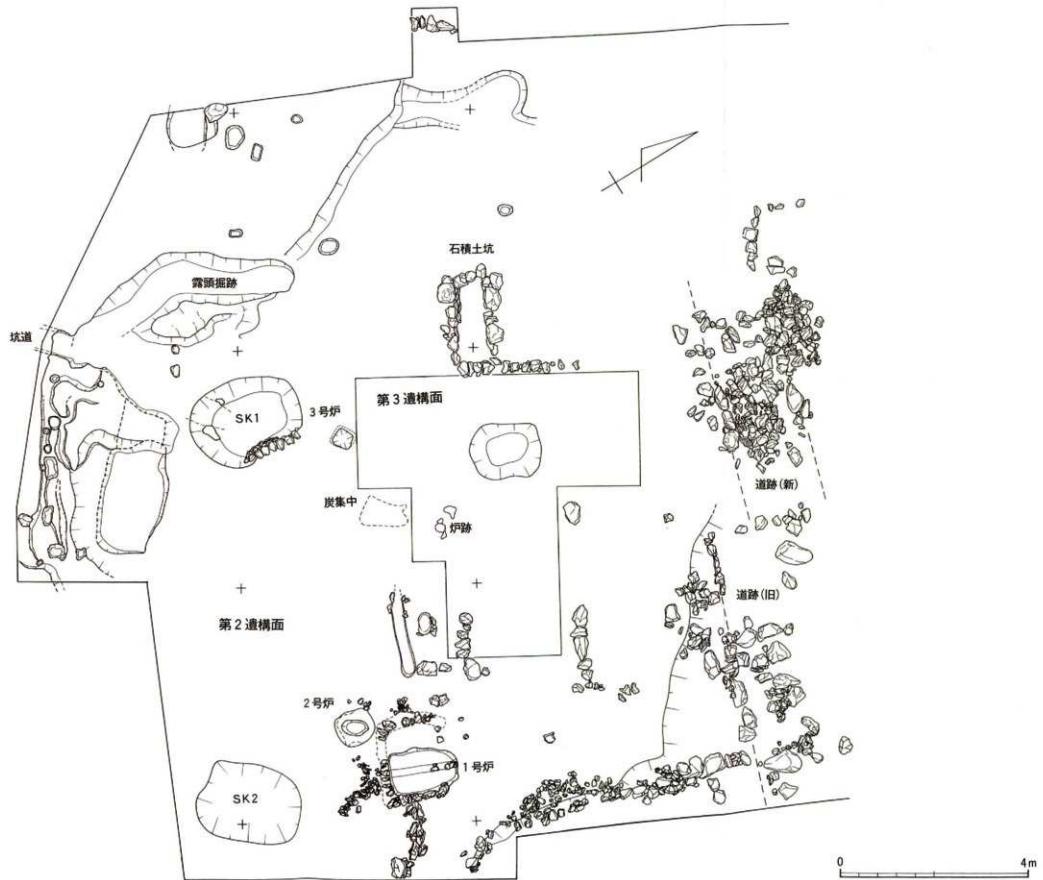


図4 造構配置図 (1/80)

2. 調査の概要

(1) 調査の概要

今回の調査の対象地は石銀地区の中央からやや南に寄った地点にある、幅40m前後の谷合に位置する平坦地である。平成5年度には谷中央にある道跡の北側160m²が調査対象とされ、平成6・7年度はこの道跡を含め南側290m²が調査対象である。

調査地の現況は竹林であり、全域が平坦で中央に道跡があり、その中に性格不明の径1~2mのくぼ地が11ヶ所存在していた。また調査地の東には石垣が存在し、この平坦地が土木工事により造成されたと推測された。

調査は任意に5m四方の調査区を設定し、南北方向の杭を南から1~5、東西方向の杭を西からA~Dとし、調査区の名称は南西隅の杭をもってA1区のように呼称することにした。現場の作業は全域の表土除去後、遺構の検出作業をおこなった。

検出した遺構の概要は、中央に東西方向の幅1.0~1.4mの道跡があり、その南側に石列や礎石の一部が検出され、建物跡になることが判明した。また精査の結果、建物の内部には土坑や炉跡が検出され、北側の建物跡と同様に吹屋（製鍊所）跡になると考えられた。また調査区の南斜面の裾では坑口を検出している。

調査の結果検出した遺構として、礎石・石列などの建物跡の一部、建物内の施設と考えられる、土坑・石積土坑・炉跡などがある。遺物には陶磁器、つるはし・古銭などの金属製品がある。今回特に注目されたのは精錬炉が検出されたことで、この部分については調査区を拡張し平成7年度に調査を実施し、その構造や性格を把握することにした。

(2) 遺構・遺物

今回の南側調査地の遺構面については、調査を実施した中で三面あることが明らかになった。遺構面とそれに伴う遺構について次のように整理し、調査概要をまとめることにする。第1遺構面は坑道跡と岩盤で検出された柱穴など、第2遺構面は建物跡の一部と内部施設の土坑・石積土坑・炉跡など、第3遺構面は建物の土間面を部分的に掘り下げて検出した土坑・炉跡である。

〔第1遺構面〕

坑道跡（図5・6）

長方形に近い台形の坑口である。上辺が60cm、下辺が45cm、高さは復原すると105cmを測り、坑道は奥に向かって左に曲がりながら斜坑となっている。坑道内の観察から長期にわたる採掘がおこなわれたとは考えられず、探査坑道の可能性がある。坑口前の土間からは陶磁器がいくつか出土しているが、その中に肥前の皿があり坑道が稼行した時期の指標となる。口径13.2cm、器高2.8cmを測り、文様は内面は松竹梅、外面は唐草文が描かれ「大明年製」の裏銘がある。時期は概ね1690~1730年代と考えられる。

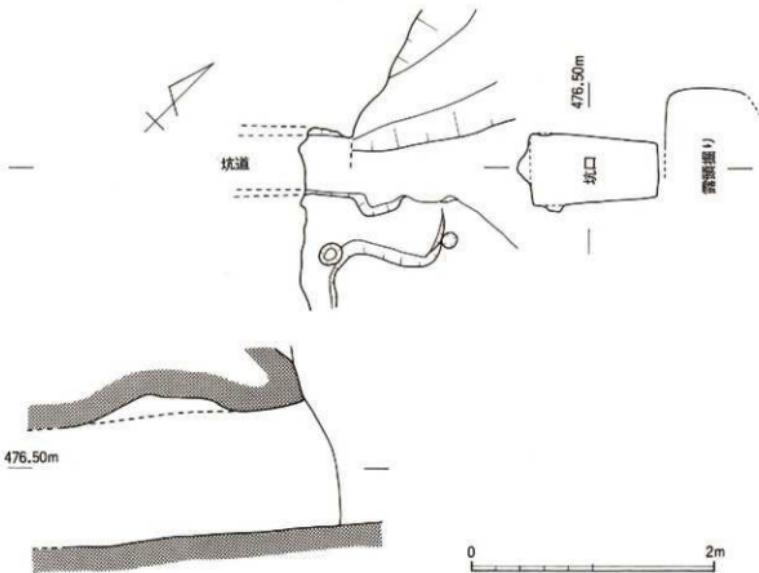


図5 坑道実測図 (1/40)

岩盤加工造構 (図7)

坑道跡の東側、岩盤を加工した平坦面に穿たれた溝・ピット・土坑などが検出された。ピットはほぼ1m間隔で東西方向に5つが並び、プランは円形と方形のものがあり、深さは20~40cm程度である。このほかにもピットが穿たれており、これらはなんらかの構造物の柱穴になると考えられる。このピットの並びと重複するように幅15~20cm、深さ5cm前後の溝が穿たれている。この平坦面の北側60cm下から、長辺2.2m、短辺1.4mを測る土坑が穿たれており、プランは隅丸方形を呈している。この土坑の北側の肩から底部にかけては削平をうけたものと考えられる。

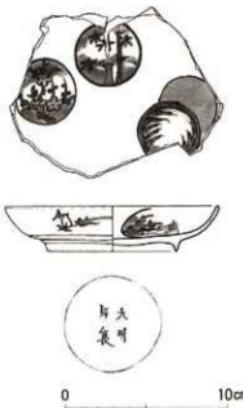


図6 坑道前出土肥前
磁器実測図 (1/3)

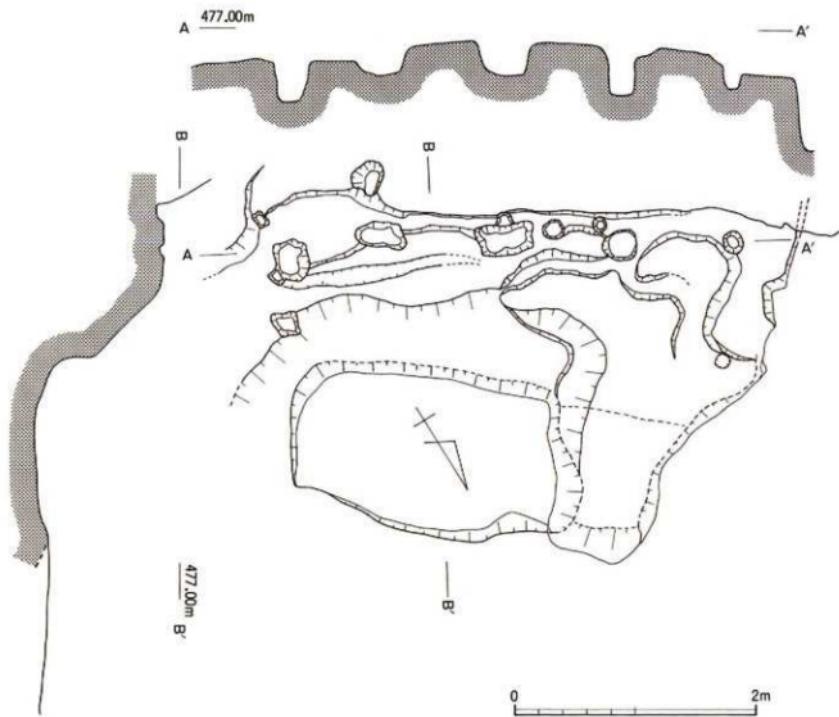


図7 岩盤加工遺構実測図（1/40）

〔第2遺構面〕

土坑（図8）

坑口の北で検出したSK1と炉跡の南で検出したSK2がある。SK1は長径2.4m、短径1.5m、深さ1.4mを測るプランが椭円形になる土坑で、東側の壁には石積みが築かれている。SK1の埋土はほとんどが礫(選鉱ずり)が堆積しており、土坑底面が平坦であり作業面積も確保できることから、鉱石を碎く選鉱施設と考えられる。SK2は長径2.2m、短径1.4mを測るプランが椭円形の土坑で、全面が粘土貼りである。SK2の底には鉄・マンガン分の堆積が観察され、水を溜めて使用された土坑の可能性がある。

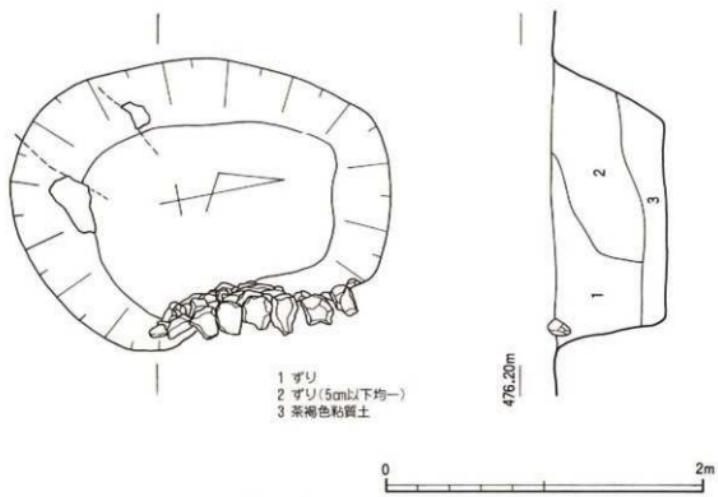


図8 SK 1実測図 (1/30)

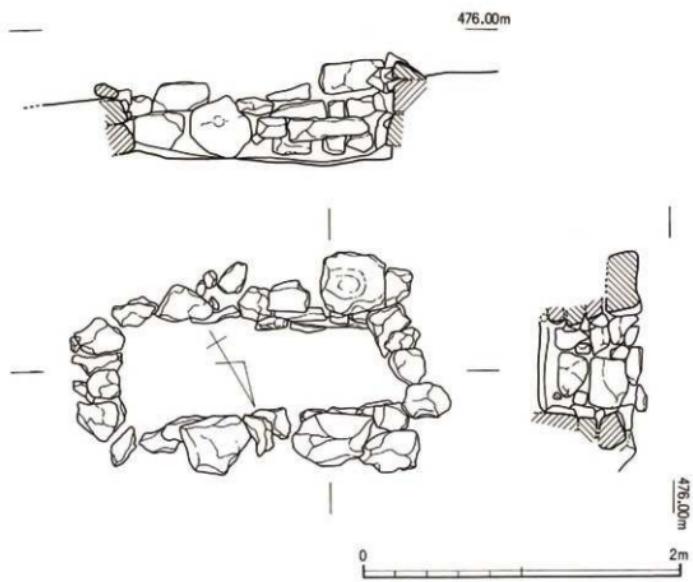


図9 石積土坑実測図 (1/30)

石積土坑（図9）

内法で長辺2.0m、短辺0.6m、深さ0.5mを測る。現地に多くみられる凝灰岩系の自然石を3~4段に積んだもので、石の隙間と底面には粘土が貼られている。内部は比重選鉱したゆりかすと考えられる茶褐色砂層が堆積している。この施設の北西には、上段に臼（要石）が掘えてあり、石積みへの転用とも考えられるが、比重選鉱と並行して臼を使用した選鉱作業がおこなわれたとも考えられる。

炉跡（図10・11）

〈1号炉〉調査区の東で検出したプランが隅丸方形の炉跡。長辺が1.5m、短辺が1.0mで炉の掘り方とは一致しないが、周囲に粘土を充填しながら築かれた石列が廻っている。炉内埋土は2層が黒褐色砂質粘土で、焼土ブロック、炭を包含し、この層から羽口・からみ・炉壁・陶磁器が出土している。南北方向の土層断面を観察すると3・4層の下面が炉底になると考えられ、大部分が赤橙色から赤茶色に焼土化し、一部には金属分が付着している。また、焼土化的範囲がほぼ1m四方に広がることが確認され、炉本体とし使用されたのはこの部分の可能性がある。周辺を廻る石列については1号炉に伴う可能性があるが、炉築造以前には何らかの施設として存在していたかもしれない。性格は炉が大規模であること、羽口の先端が2点出土し

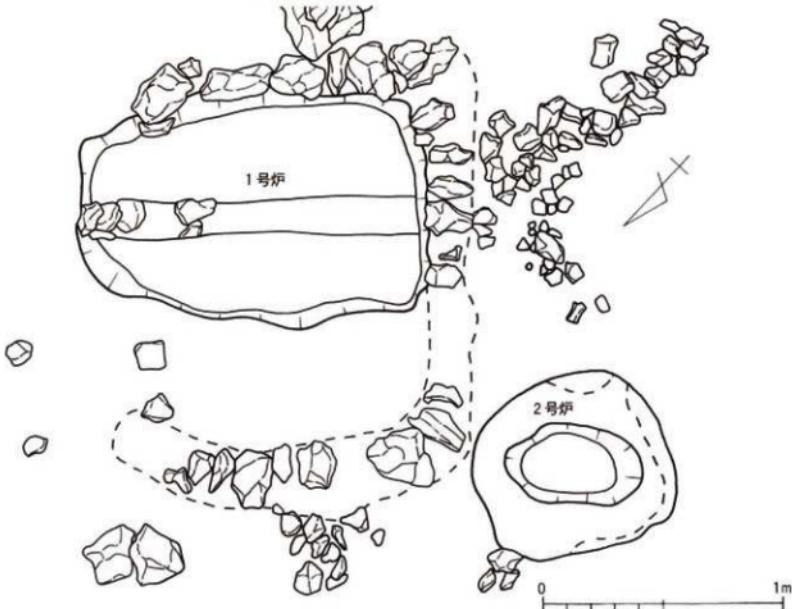
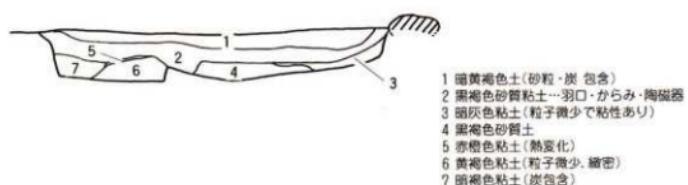


図10 1号炉・2号炉跡実測図 (1/20)

476.00m



476.00m



476.10m



図11 1号炉・2号炉跡断面図(1/20)

ていること、炉底が良く焼けていることなどから、小吹(合せ吹)炉と推定される。年代については炉内や周囲の作業面から出土した陶磁器から17世紀前半だと考えておきたい。

〈2号炉〉 1号炉の南に隣接して位置し、プランは径90cmのほぼ円形を呈している。炉内埋土は粒子が微小な茶褐色砂層で二次的な堆積と考えられる。炉底部は黄褐色粘土が一面に貼られているが、熱を受けた痕跡は観察されないので、炉底の粘土の一部が削平をうけていると推定される。炉の性格については、炉底粘土が削平されているとすれば、鉛が回収された痕跡とみることもでき、灰吹炉とも考えられるが、今後の炉の類例調査を待つことにしたい。年代は1号炉と同様に17世紀前半だとしたい。

〈3号炉〉 SK I の北で検出した方形の炉跡。一边が38cmで炉底部に黄褐色粘土が貼られている。炉上部については削平を受けたものと考えられ、炉底部一面には模が堆積し、炉の中央部分が赤茶色に熱を受け変色している。

〔第3遺構面〕

炉跡（図4）

黄褐色粘土で築かれた炉で、そのほとんどが壊れた状態で検出された。炉の内部と思われる部分が赤茶色に変色している。

土坑（図4）

長径 1.5 m、短径 1.1 m のプランが橢円形の土坑である。性格は不明。

〔その他の遺構〕

露頭掘り跡（図4・6）

第1遺構面で検出した坑道跡の北で、鉱脈を露頭掘りで採掘した痕跡と思われる溝状遺構を検出した。幅 0.7 ~ 1.2 m、深さ 0.7 m 前後を測り、溝は坑道跡の下部で坑道となっている。第1遺構面の坑道跡と同じ鉱脈が採掘されたと考えられ、溝の埋土からは16世紀後半代の陶磁器が出土している。

道跡（図12）

調査区のほぼ中央で検出された幅 2 m 前後の道跡で、調査前で確認された道とほぼ同じ位置で検出している。調査地の東の平坦地と調査地を結ぶ部分はスロープ状になっており、その中に階段状に石列が 3 段検出され、周囲からは比較的大きな石が出土していることなどから、本来このスロープは石段であったと考えられる。このスロープ部分の道の方向と、平坦な部分で検出した石敷きの道の方向が少しずれることや、若干の高低差があることから、新旧二つの道が存在したものと考えられる。

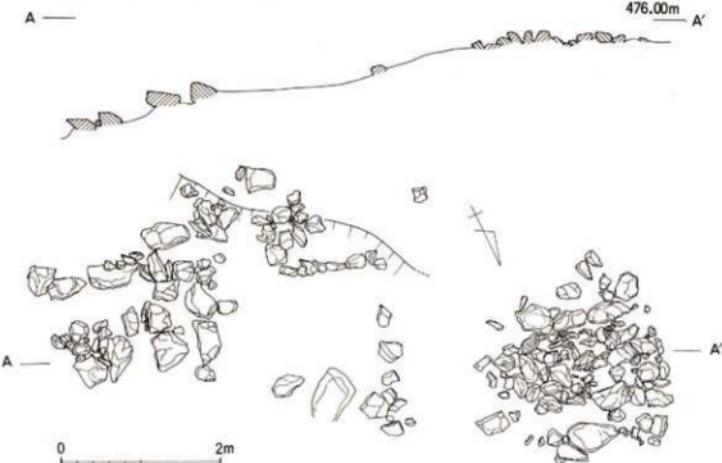


図12 道跡実測図 (1/60)

〔出土遺物〕

〈つるはし・羽口〉(図13)

図13-1は第2造構面、SK1の東の作業面から出土した鉄製のつるはしである。現存長14.5cmを測るが、全体に錆化が著しく原形は判明しない。これまでの調査で出土例はないが、江戸期の文献に山道具としてみえる「鶴嘴」と形状が似ており、つるはしと推定される。2・3は1号炉跡から出土した吹子の羽口の先端である。1号炉での精錬作業に伴い使用されたものと考えられる。2・3とも断面は方形を呈し、通気孔は円形で、いずれも先端部分は一面に金属分が付着している。2は一辺が5cm前後、通気孔の径が15mm、3は一辺が5cm前後、通気孔の径が18mmを測る。

〈陶磁器〉

今回の調査の出土遺物で最も多いのが陶磁器である。陶磁器の全容は今後の整理作業によるところが多いが、その概要について組成を中心まとめるにすることにする。第2造構面の年代については概ね17世紀前半と考えられるが、造構面から出土する陶磁器は国外では中国磁器、国内では唐津・伊万里・備前・瀬戸美濃などの陶磁器があり、これらの年代観が16世紀末から17世紀前半であり、出土量は圧倒的に唐津・唐津系が多い。第1造構面及びその上層からは伊万里などの肥前系のものが多くなり、17世紀から18世紀代の年代観をもつものが中心である。部分的に実施したたち割り調査により、第2造構面の下層に唐津・唐津系を含まず、中国・備前・瀬戸美濃の包含層が確認されており、これが概ね16世紀後半代の組成と考えられる。陶磁器の他にはかわらけが多く出土しており、これらの大部分は灯明皿になると考えられる。

〈金属製品〉

釘などの鉄製品、キセル、錢貨がある。錢貨は寛永通宝と無文錢がある。

〈石 製 品〉

砥石、臼がある。臼は回転臼と石見銀山でかなめ石と呼ぶ摺臼の二種類があるが、摺臼型が多い。また、径が1~2cmの河原石が十数点出土しているが、このうちいくつかは墓石になる可能性がある。

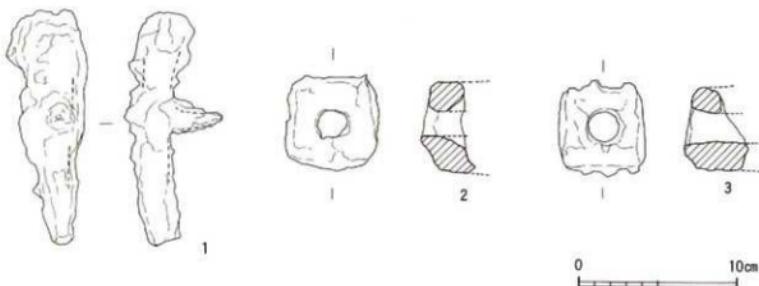


図13 つるはし・羽口実測図 (1/3)

IV 小 結

平成6・7年度調査を実施した石銀千畳敷南向山地区の調査成果について、平成5年度の成果も併せまとめることにする。

まず遺跡の性格・年代については、調査の結果検出した遺構や出土遺物から、於紅ヶ段と石銀を結ぶ道を挟んで、北と南に位置した吹屋跡と考えられる。それぞれの吹屋内部には選鉱作業（粉成）と精錬作業（床吹）の施設があり、建物の構造は礎石建物である。この吹屋跡の年代については出土した陶磁器などの年代から17世紀前半代と考えられる。また吹屋に関連する遺構のほかに、露頭掘りの跡や坑道跡が検出され、採鉱関連遺構の実態が明らかになったのも大きな成果といえよう。

今回の調査の結果、石見銀山の最盛期である17世紀前半代に石銀地区に吹屋が存在することが明らかになった。このことは採鉱の場所に隣接して製錬所があり、そこで比重選鉱を含めた選鉱と精錬がおこなわれたということである。これまで石見銀山の採鉱・選鉱・精錬について具体的にどの場所でどのような内容の作業が行われていたかについては未解明であり、今回の調査成果は石見銀山経営の実態にせまる大きな意義があったと考えられる。また吹屋を建設した平坦地が、石垣や石列を用いて大規模に造成され、また道路も併せて敷設されていることや、出土した遺物に国内外の陶磁器が大量にあることなどは、石銀や鉱山の町が存在したことを示している。

今後の調査課題については以下の点について指摘しておきたい。まず精錬遺構の構造と性格の解説についてである。福石鉱床の鉱石の精錬については、銅鉱石を含まないため小吹-灰吹-清吹という精錬工程を考えたいが、検出した炉跡がどの工程になるのか、今後科学分析などを実施し炉の特定をする必要がある。次に年代決定であるが、陶磁器の編年観を指標としているが、たちわり調査を実施した結果、遺構面が短期間に何面も築成された可能性があり、出土陶磁器全体の全体の組成の中で考える必要がある。最後に石銀地区全域について、製錬所・集落・寺（墓地）などの配置を明らかにし、遺跡の全体像を把握するように調査をすすめなければならない。平成7年度にから作成を開始した遺跡測量図（500分の1）によれば、現在竹林に蔽われている石銀地区的遺跡の分布状況が把握できる。それによれば、池や井戸・石垣・坑道などの施設をもつ平坦地（テラス）が道沿いだけでなく、尾根の上や斜面にも展開していること、墓地の存在などにより寺跡が石銀に少なくとも2ヶ所であること、現在のこの道は本谷・清水谷・柄畠谷（昆布山谷）と石銀を結んでいることなどがわかる。この基本となる測量図をもとにさらに分布調査が必要である。

石見銀山遺跡がもつ歴史的価値・意義という点において、今回の調査は大きな意味をもつことになった。今後の調査はますます学際的な視野で展開される必要があろう。

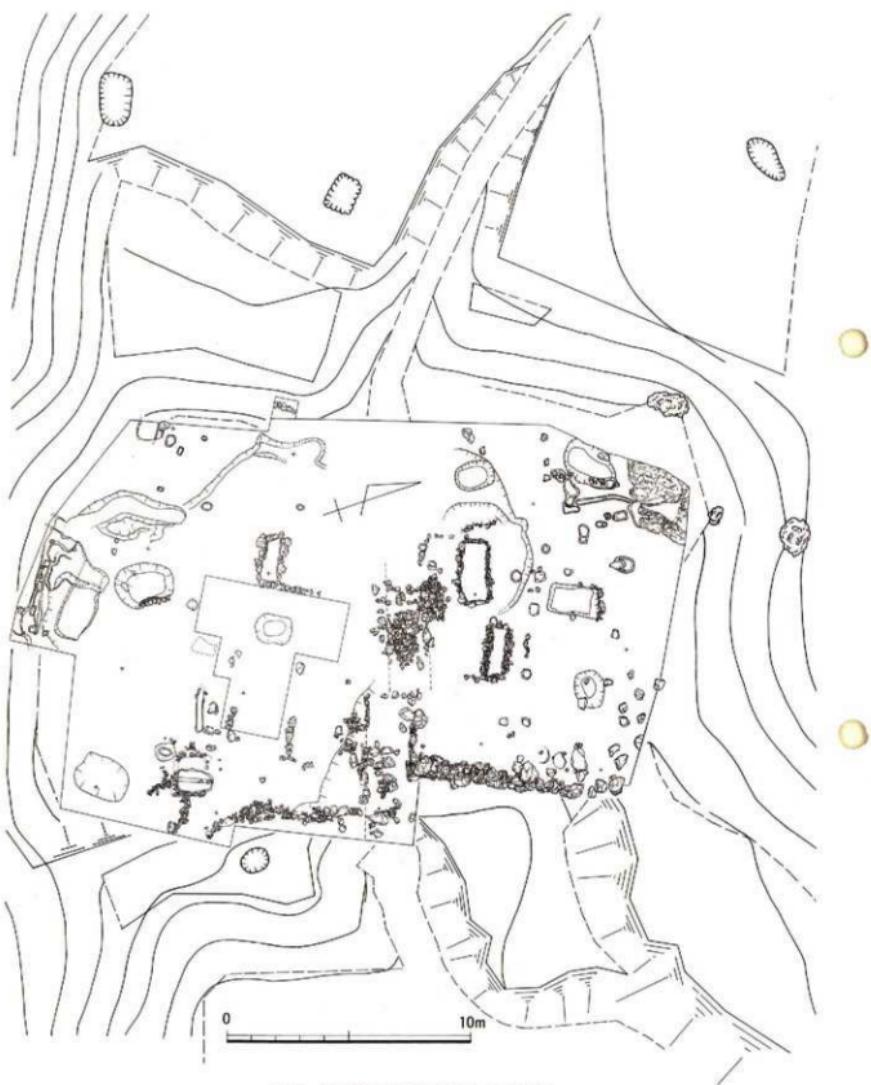


図14 石銀地区遺構配置図 (1/200)



遺跡全景（西から）



遺跡全景（北から）



遺構検出状況
(部分: 東から)



遺構検出状況
(部分: 東から)



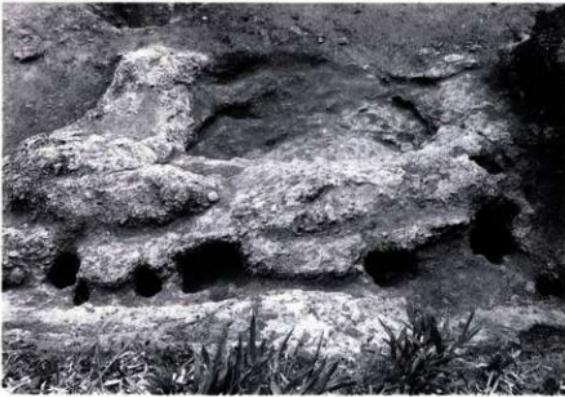
坑道跡



坑道跡と露頭掘り跡



岩盤加工遺構



岩盤加工遺構





1号炉・2号炉



1号炉内土層



1号炉たちわり状況



1号炉たちわり状況



2号炉



2号炉たちわり状況



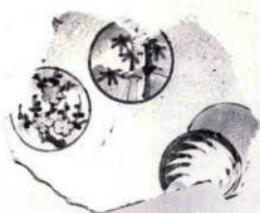
2号炉たちわり状況



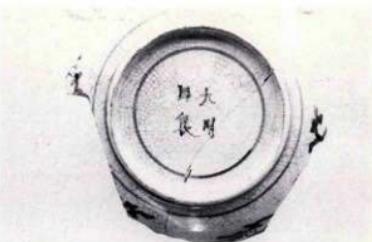
3号炉



調査区内土層



坑口前出土肥前磁器皿
(内面)



(外面)



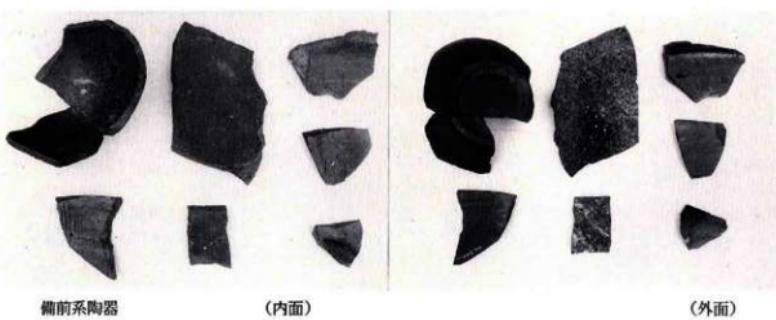
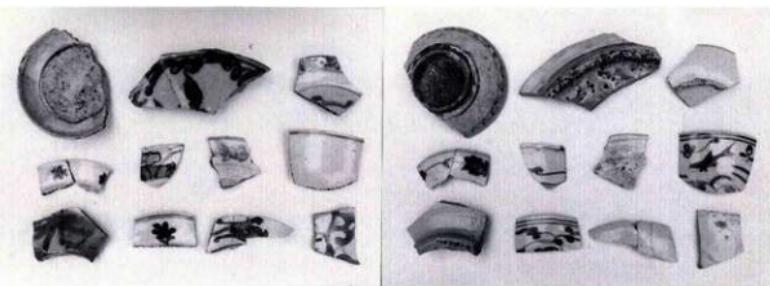
つるはし



1号炉出土羽口



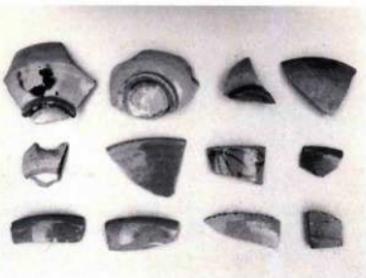
1号炉出土遗物





肥前陶磁・伊万里

(内面)



(外面)

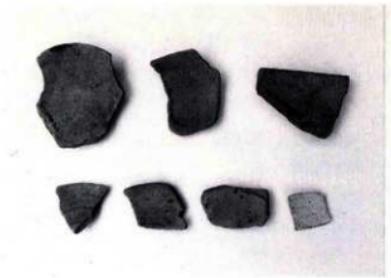


瀬戸美濃系陶器

(内面)

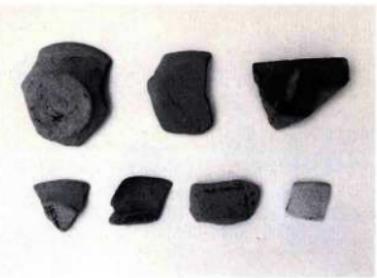


(外面)



かわらけ

(内面)



(外面)



鐵 製 品



錢 貨



石 製 品



からみ（船津）

**大田市埋蔵文化財調査報告 20
石見銀山遺跡発掘調査概要 8**

1997年3月

島根県大田市教育委員会
(島根県大田市大田町大田口1111番地)

O

O